

幕末期姫路の貸本屋目録

——樊圃堂灰屋輔二『貸本目録』——

山 本 卓

近世文学の享受において、殊に一般人士の読書においては、貸本屋が甚だ重要な機能を果たしたことは、長友千代治氏『近世貸本屋の研究』に詳述されるところである。同書においては、貸本屋の誕生・機能からその読者の問題まで総合的に探究され、貸本屋の各論としては河内柏原三田家出入りの行商本屋・城ノ崎の中屋甚左衛門・名古屋の風月孫助・同じく大野屋惣八を取上げ、その実体と特性を明らかにされている。その蔵書内容・構成については、日本一と称される名古屋の貸本屋大野屋惣八いわゆる大惣が明治に入って蔵書の

売立のために作成した『大野屋惣兵衛蔵書目録』（柴田光彦氏『大惣蔵書目録と研究』所収。以下、大惣目録と略す）を主たる材料として説かれた。かくのごとき目録が他に伝来しないためか、城ノ崎の中屋甚左衛門の蔵書内容の検討においては、散逸したその旧蔵書

を広範に博搜され、大阪府立中之島図書館・早稲田大学図書館・京都府立総合資料館などにこれを求め、ひとつひとつ洗い出されたのである。

全ての貸本屋はその営業にあたり必ずその原簿、あるいは借手に見せるための商品カタログのごとき目録の類を作成していたはずである。近世期の貸本屋の蔵書内容・構成を知るためには当時のこの類の目録を根拠とするのが最善であろう。ところが、そのような目録の現存は従来知られていないようなのである。この種の目録が現に伝わらないのは、いわば事務的な書類であったために明治以降の古書市場においては商品価値なしと判断されて廃棄されたためでもあるのか。ここに新出の『貸本目録』は幕末期の地方書肆のものであるが、貸本営業用の目録そのものである。明治以降百有余年の

間、本書もまた廃棄処分^の危機に晒されたこともあろうが、辛うじてその命脈を保ち得たことには、やはりそれなりの感慨は禁じ得ない。

この目録は表紙に「貸本目録」と墨書され、オモテ表紙見返しに

「此目録何方様へ参り御一覽相済候得ば早速御戻し被下度奉頼上候

灰屋輔二」、ウラ表紙見返しには「嘉永四亥三月改 樊圃堂店」

と墨書されているところから、灰屋輔二（堂号樊圃堂）なる書肆の嘉永四年現在の貸本目録であることが知れる。オモテ表紙見返しの文言から判断して、業務上の原簿のようなものではなく、貸本を求めるお客に見せるための目録であろうと思われる。この書肆は井上隆明氏『近世書林版元總覧』には収録されていないが、出版業を営んでいなかったかというところではない。阪急学園池田文庫『博物頃本目録』を検すると、次の四点の兵庫くどきの版元であるを知る。

- 47 新はん
はやりおんど ぬびや甚九 ひやうごくとき 姫路せんば御堂前
くまのぶし 灰屋輔二板
- 60 ひやうごくとき さいの川原 姫路せんば御堂前
はやりおんど 灰屋輔二板
- 66 ひやうおんど 忠臣蔵花づくし 姫路せんば御堂前
ひやうごくとき 灰屋輔二板
- 69 新はん 那須の与いち ひやうごくとき 姫路せんば御堂前
はやりおんど 灰屋輔二板

このような出版物の常として、刊年の明記はないが、「姫路せんば御堂前」と住所は知れる。同族でもあろうか、姫路東二階町の灰屋

又市には「^{円正寺}赤間関坊主落」の兵庫くどきもある。兵庫くどきは半紙本で僅か二丁の最も薄い草紙ではあるが、このようなものでさえ多くは大坂の綿屋喜兵衛などの大書肆の手に掛る。灰屋輔二は姫路の地方書肆ではあるが、貸本だけではなく、出版業をも営んでいた点は特記し得よう。

横本（半紙長帳綴）仕立て毎半丁ごとに約八点の書名を掲げるを原則とし、全二七丁で二六〇点（複数の編がある場合でも一点と数えた）の作をリストアップする。収録にあたりおおまかながら分類が施されており、そのうち分類名を明示するのは「随筆物類」（二二オから一四ウ）「芝居本部」（一八オから一九オ）「敵討物類」（二三オから二六ウ）である。明記はしていかなくとも、一オから四オまではいわゆる実録体小説（以下、実録と略す）で、五オから五ウまでは通俗物、六オから七ウまでは軍書、八オから一一オまでは読本、一五オから一七ウまでは馬琴読本、二〇オから二一オまでは人情本、二二オ・二三ウは滑稽本と大ざっぱな分類は認められよう。これらの蔵書内容個々の詳しい検討も必要ながら今回は割愛することとして、以下、本目録の分類法の特徴を述べることにする。

分類の杜撰を指摘してもさしたる意味もないが、殊に軍書（六オから七ウ）と読本（八オから一一オ）と私に称した項目には混雑がかなり認められる。例えば軍書に収録される「星月夜」（六ウ）が

『星月夜頭晦録』であれば読本であるし、逆に読本の項の『曾我勲功記』（八才）などは軍書である。すなわちこの二分類はひと続きとも考えられるのである。更に「敵討物類」と明示して分類されるものは殆どすべてが読本である。人情本・滑稽本の分類が今日の認識にはば等しいに對して、今日言うところの読本はかくのごとくに分類されていたのである。この問題は大惣の場合どうであろうか。大惣目録を検するに、いうところの読本は、主として「判紙形敵討絵入」（第五冊）と「^{判紙形}絵入軍書」（第一〇冊）に分けて分類されている。すると、従来は大惣にしか目録が残らなかったためこの分類意識を貸本屋一般のものに演繹するには躊躇されるところであったが、いまここに灰屋目録にも類似のものを認めうるので、当時の貸本屋一般の分類法と考えてよいこととなろう。なお、大惣では「敵討」（第一五冊）に分類されるのは、写本の実録のみで読本は含まない。

更に読本で注目されるのは、一五才から一七ウにわたり、「里見八大伝」以下馬琴作あるいは『絵本西遊全伝』のごとき馬琴関係作を集め（『景清外伝』は除く）、敵討物類や先述の仮に読本と称した分類と別置する点である（ただし、読本と仮題した項には「皿々郷談」など、敵討の分類にも「新累（解脱）物語」などの馬琴作が混じる）。大惣目録に「八大伝」と『俊傑神稲水諧伝』で一項目

とする事実はあるが、広く馬琴作を別置することは灰屋目録の特色といえよう。もちろんながら馬琴人気の反映である。

他に特色として指摘しうるのは、『太閤真頭記』全一二編一四〇冊を筆頭に写本の実録の分類項目が巻頭を飾ることである（一才から四才）。『浪花戦記』『慶安太平記』には置本（複本）が備わり、『^{中白門}答』『中山記』は書名は異なるものの共に寛政の尊号事件に取材する実録である。長友氏が「大惣の蔵書内容を吟味され」（『貸本屋では』）写本を作って実録体小説として読者に供し、読者の要求に応えた「江戸時代においては軍書、敵討がもつとも愛読される分野のものであったことがわかる」（『前掲書』）と説かれたごとく、実録が読者に好まれており、灰屋方においてもこれを重要視していたことが、本目録からも読みとれよう。

この目録では、書名に次の四種の印を付す場合がある（図版参照）。すなわち、（一）書名の下に捺された[㊦]の朱印（図版の「楠正行戦功図会后編」「熊谷連生一代記」「曾我物語」）、（二）書名下の筆裏（尻骨）のごとき朱の〇印（図版の「中国太平記」）、（三）書名上欄の長方形の朱印（図版の「楠正行戦功図会后編」）、（四）書名の右の傍線（墨書）（図版の「楠正行戦功図会后編」「中国太平記」）、である。なお、このうち（三）が捺される場合は、一例を除いて全て

(4) も並存する。

これらは何を意味するものなのか。先ず(1)であるが、「沽」は漢字本来の意味から考えると古い意と売買の意などがあり、疲れ本を意味するものなのか、販売も可能との表示なのか判然としない。が、節用集を検するに、例えば『合類節用集』に「沽 売買也」とあり、幕末の『大日本永代節用無尽蔵』『万代節用集』に至るまで売の意で収録されている。ゆえに、ここでも販売可能な表示と捉えてはどうかと思う。とすると、置本(複本)の存在も考えられるやもしれない。(2)については全く分らない。(3)(4)は、現在の古書目録にゴチック表記が混じることく、いわば人気作・目玉商品の表示かとも想像するが、根拠はない。

翻刻に先立ち、書誌事項を略述する。

○体裁 横本(長帳綴)。一五、七×二一、六種。一冊。

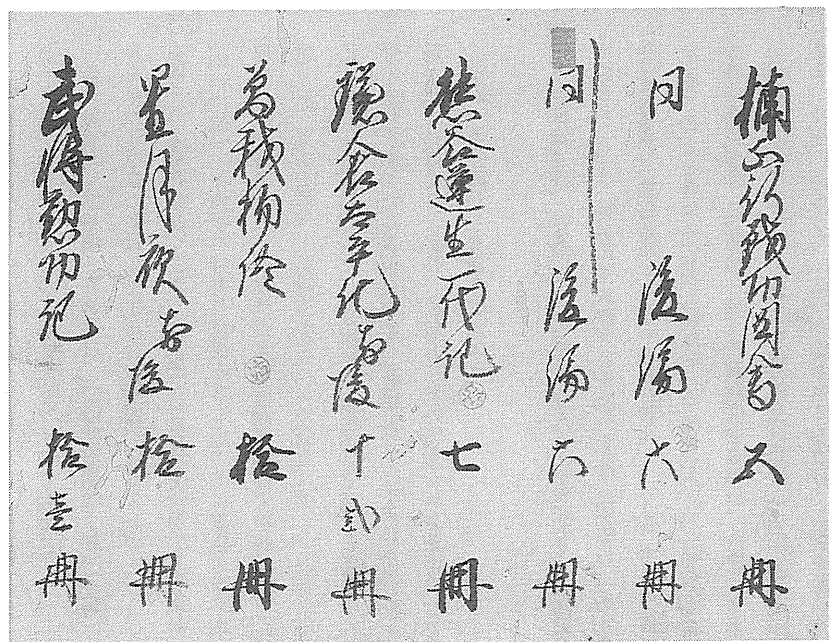
○表紙 薄群青、卍繋ぎ模様。中央に「貸本目録」と墨書。題簽なし。

○丁数 二七丁。丁付なし。

○内題・尾題・柱題なし。

○行数 不定であるが、多くは半葉ごとに八行。

○オモテ表紙見返しに「此目録何方様へ参り御一覽相済候傳ば早速



御戻し被下度奉頼上候 灰屋輔二」と墨書。

○本文末に「預り置證文之事（一行虫損）右之銀子」と墨書。

○卷末識語「嘉永四年亥三月改 樊圃堂店」（ウ表紙見返し）と墨書。

○蔵者 拙蔵。

〔翻刻凡例〕

一、できるかぎり原本を尊重するよう努めた。

一、誤字・当字も原則として原本のままとしたが、一部通行の字体に改めたところもある。

一、前述の書名に付される印については、（1）は^①と作字し、（2）は○を、（3）は□をもつて充て、（4）は傍線を付した。

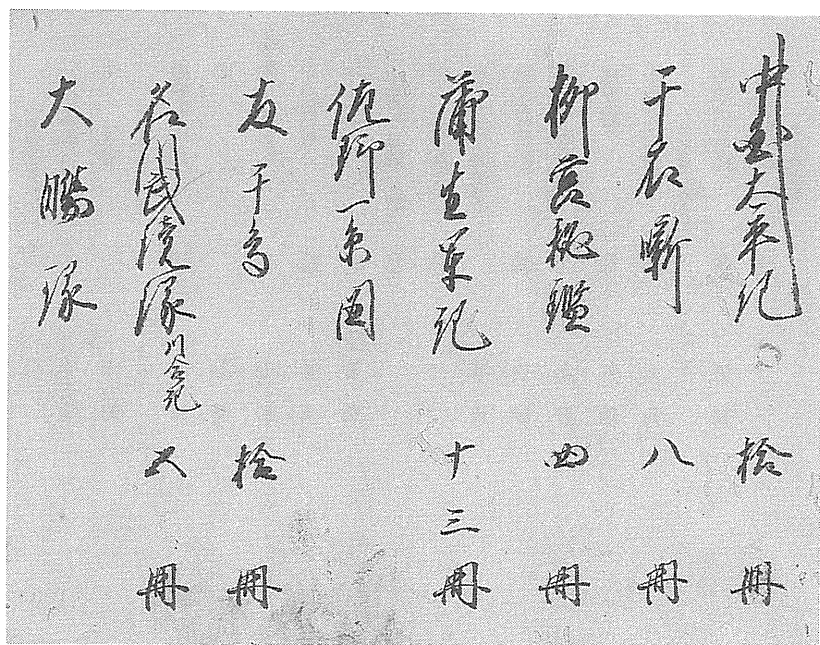
〔翻刻〕

貸本目録

（表紙）

此目録何方様へ参り御一覽

相済候得ば早速御戻し被下度奉頼上候。



灰屋輔二

鎮西御軍記

⑤

四拾冊

(才表紙見返し)

一名薩摩實

岩見武勇伝

⑤

十五冊

同

後編

十五冊

一名薄田一代記

慶安太平記

⑤

十冊

同

荒川武勇伝

⑤

五冊(二才)

中白門答

⑤

拾冊

中山記

⑤

五冊

川中島合戦 前

⑤

同 後編

⑤

宇都之宮金清水

⑤

五冊

武家盛衰記

⑤

拾冊

同 後編

九冊

雨夜燈

⑤

五冊(二ウ)

小説聞秘録

⑤

六冊

一名加賀之山集記

島津内乱記

⑤

五冊

扶桑義臣伝

⑤

一名赤穂実録

拾五冊

一 太閤真蹟記

⑤ 初編

十冊

式編

拾冊

⑤ 三編

拾冊

⑤ 四編

拾冊

⑤ 五編

拾冊

⑤ 陸編

拾卷

七編

拾冊(二才)

真蹟記

八編

拾冊

九編

拾冊

⑤ 拾編

拾冊

拾一編

拾冊

⑤ 拾二編

三拾冊

大尾

一 関ヶ原軍記

⑤

三拾冊

同 後編

⑤

三拾冊(二ウ)

浪花戦記

⑤

三拾冊

同

全書先代萩	⑤	五冊
西国順礼女敵討	⑤	五冊
真田三代記 初		拾冊
同 四編		三冊
柳沢一代記	⑤	五冊 (三才)
高木折右衛門武勇伝		四冊
同 後編		四冊
板倉政要記		四冊
大岡忠相秘事		四冊
平井権八一代記	⑤	五冊
清政実記	⑤	
満仲五代記	⑤	
葛藤別帋	⑤	五冊 (三ウ)
天保遺事	⑤	拾冊
大塩一代		
天下茶屋真伝記	⑤	十七冊
敵討村野実記	⑤	拾五冊
田沼実記		五冊
小栗実録敵討		五冊
雨夜物語		四冊

諸国里人談

(半丁空白)

五冊 (四才)
(四ウ)

□絵本通俗三國志

貳編

拾冊

參編

拾冊

四編

拾冊

五編

拾冊

六編

拾冊

七編

拾冊

八編

拾冊

大尾

(五才)

絵本漢楚軍談

⑤

拾冊

同

後編

⑤

拾冊

□通俗呉越軍談

十八冊

同戦国策

(以下、四行分空白)

(五ウ)

源平盛衰記

六冊

保元平次物語

⑤

拾冊

□拾遺信長記

拾三冊

□同 後編

拾冊

琉球軍談

拾冊

義経勲功記

五冊

同 後編

五冊

太平記図絵

八冊 (六才)

楠正行戦功図会

五冊

同 後編

六冊

□同 後編

六冊

熊谷蓮生一代記

七冊

鎌倉太平記 前後

十式冊

曾我物語

拾冊

星月夜 前後

拾冊

武将勲功記

拾壹冊 (六ウ)

中国太平記

拾冊

千石噺

八冊

柳営秘鑑

四冊

蒲生軍記

十三冊

佐野一系図

拾冊

友千鳥

拾冊

名川武鏡録 川合記

五冊

大鵬録

(七才)

鯰包丁

式冊

今木伝七唐人殺し

岩渕物語

式冊

敵討人之鑑

壹冊

武勇伝

壹冊

清正真伝記

七冊

菊池軍記 前後

拾冊

(二行分空白)

(七ウ)

太閤屋
十杉伝 初編より
四編迄

○

式拾冊

不知火艸帯 前後

拾冊

商人軍配記

○

五冊

左刀奇談 左り甚五郎
一代記

○

五冊

菅原実記

○

六冊

曾我勲功記

○

十六冊

西国盛衰記

○

拾冊

常山奇談

五冊

同後編

五冊 (八才)

四

前編

六冊

後編

六冊

繪本忠臣蔵

前編

⑤

十冊

後編

拾冊

海外新話
いそやす

⑤

五冊

拾遺

⑤

五冊

楠公記 三編

⑤

拾冊

箱根靈顯記

⑤

六冊

川太郎一代記

五冊 (一〇ウ)

阿古義物語

⑤

拾貳冊

前後

楠公記 初編

⑤

拾冊

貳編

⑤

拾冊

熊谷蓮生一代記

⑤

七冊

隅田川梅柳新話

⑤

六冊

(四行分空白)

(一一才)

(半丁空白)

(一一ウ)

隨筆物類

駿台雜話 写本

○

五冊

名家略伝

○

四冊

理斎隨筆

○

五冊

百家琦行伝

⑤

五冊

觀善夜話

○

五冊

梅園日記

○

五冊

猿著門集

⑤

三冊 (一一才)

煮雜記

三冊

北越雪普

○

三冊

田舎莊子

⑤

四冊

玉石雜志

○

五冊

前編

五冊

後編

五冊

野々口隆正著述
兼好法師考證

⑤

五冊

近世畸人伝

拾冊 (一一ウ)

河内名所

○

三冊

撰州名所

○

拾冊

播州名所

○

五冊

山海名所	五冊
金比羅名所	六冊
西国卅三所靈顯記	五冊
一休諸国物語拾遺	三冊
年中行事	五冊 (一三才)
東遊記	拾冊
西遊記 続編	五冊
準提觀音靈顯記	三冊
北越廻拔記	五冊
万国新話	五冊
朝鮮物語	三冊
四戰記聞	四冊 (二三ウ)
五雜俎	五冊
諸国里人談	五冊
伊勢貞丈著 四季艸	三冊
練兵実記	一冊
醒提記談	五冊
雨夜物語	四冊
唐土名勝図会	六冊

閑田次筆	四冊
同耕筆	四冊 (一四才)
茅窓漫録	
聖号自在	
廿四輩順拝図会	前後 拾
鳩巢逸話	四冊
一休幼艸	
役行者一代記	五冊
(三行分空白)	(一四ウ)
里見八犬伝 曲亭馬琴著述	
初式参四五編	各五冊当
六編	六冊
七編	七冊
八編	十冊
九編初	六冊
中帙	拾式冊
九編十三より九拾式迄大尾	(一五才)
俠客伝 初編より 馬琴作	
同 式編三編四編迄	

美少年 初編より 馬琴作

式參四編五六七八編迄

馬琴作

左用姫石魂録

同 後編

馬琴著述

俊寛物語

同 後編

青砥藤綱記

同 後編

馬琴作

夢物兵衛胡蝶物語

南柯夢 一名赤根半七 後編 全伝

同式編三編

景清外伝 初

同 式編

同 参編

弓張月 初編

後編

統編

六 冊

五 冊

七 冊

五 冊

⑤

五 冊

五 冊

四 冊

拾老冊

五 冊

五 冊

五 冊

五 冊

五 冊 (一六才)

六 冊

六 冊

六 冊

拾遺

殘編

(三行分空白)

繪本西遊全伝

初編

式編

三編

四編

新編水滸伝 馬琴作

初編より

六拾まで

(二行分空白)

朝比奈嶋廻記

初編

式編

参編

四編

五編

六編

(四行分空白)

六 冊

六 冊

(一六才)

拾 冊

拾 冊

拾 冊

拾 冊

六拾冊

(一七才)

五 冊

五 冊

五 冊

五 冊

五 冊

五 冊

(一七ウ)

芝居本部

遊山桜	前編	六冊
同	後編	六冊
高音鼓	前編	五冊
同	後編	五冊
素袍台		七冊
巖流島	前	六冊
同	後編	六冊 (二八才)
桑名屋徳蔵 入船囃		六冊
義恋しからみ		五冊
同	後編	五冊
鳴戸白波		八冊
会稽山		七冊
お染久松		五冊
四ッ谷怪談	前	五冊
同	後編	五冊 (二八ウ)
姉妹達大礎		七冊
(七行分空白)		(一九才)

(半丁空白)

いろは文庫	⑤	拾貳冊
梧色糸		六冊
豹之巻		六冊
寅之巻	⑤	三冊
腹之巻		六冊
出世娘	⑤	九冊
女小学	⑤	六冊
末摘花		十五冊 (二〇才)
簀の梅		九冊
錦之里	⑤	十五冊
袖之梅		
錦之梅	⑤	六冊
里 浮世酒屋		
教訓二筋道	⑤	十貳冊
坂東水滸伝	⑤	六冊
里振毛	⑤	三冊 (二〇ウ)
梅之春	⑤	五冊
娘消息	⑤	五冊

(一九ウ)

糸のしらへ

五冊

永代鏡

〇

花物語

⑤

前編

五冊

後編

五冊

(二行分空白)

(二一オ)

(半丁空白)

(二一ウ)

八笑人

前編

六冊

後編

六冊

医者ふり毛

⑤

前編

四冊

後編

三冊

俄天狗 前編

五冊

後編

⑤

不三夢

⑤

百馬鹿

⑤

田舎芝居甲子侍

⑤

売色安本丹

六冊

世中貧福編

六冊

道中膝栗毛

十八冊

東海道之部

同

六冊

同 大산道中

(三行分空白)

(二一ウ)

敵討物類

霜夜里

⑤

累物語

⑤

優曇花物語

七冊

小町物語

⑤

千代姫化物語

五冊

七福七難図会

五冊

浪花男

⑤

金屋金五郎全伝

五冊

飛立をび

⑤

宇次記聞

⑤

八百屋お七胡蝶夢

五冊

(二三オ)

在原艸紙

明月清談

通夜物語

綴之錦

若葉栄

隻蝶記

比玉伝

出雲物語

皿山奇談

神稻水滸伝

かしく全伝

白石孝女伝

近江懸物語

かげろふ巻

千丈松

石井物語

河内木綿団七嶋

東鑑操物語

雲井物語

崇禪寺馬場

名松の雪

⑤

⑤

⑤

⑤

⑤

⑤

五冊

五冊

五冊

六冊

五冊

六冊

六冊

五冊

五冊

六冊
(二四才)

六冊

六冊

五冊

五冊

五冊

五冊

五冊

六冊

男伊達和漢染分

室之八嶋

孝勇譚

鶴物語

太田道觀忠義伝

鹿間揚布染

鬼嬢伝

飛驒内匠物語

一二艸

仙楂二葉

深窓奇談

医者談義

梨園

泉親平物語

忠孝貞婦伝

雨夜月

昔語松虫塚

安達原

双忠録

(二四ウ)

五冊

七冊

八冊

五冊

六冊

五冊

五冊

六冊
(二五才)

五冊

五冊

五冊

五冊

五冊

五冊

六冊

五冊
(二五ウ)

六冊

六冊

青砥石文

稚枝鳩

馬琴作

巷談坡隄庵

日本永代藏

阿古義物語

同 後

川太郎一代記（以下余白）

（半丁空白）

預り置證文之事

（一行虫損）

右之銀子

（二七ウ）

嘉永四亥三月改

樊圃堂

店

（ウ表紙見返）

〔校正追記〕

長友千代治先生にご示教を仰いだところ、貸本文化研究会会長であられる大竹正春氏をご紹介いただいた。大竹氏より江戸期の貸本屋目録の現存は知られていないとのことご教示を賜り、更にご所蔵の「明細帳」なる明治期の貸本屋の貸本台帳の借覧を許された。

同資料については、廣庭基介氏が同研究会昭和五三年九月例会において「明治末期の貸本屋附込帳」と題してご発表なされたそうで、そのご発表によると、一冊目が一九三丁、二冊目一四九丁、三冊目三〇四丁、四冊目一〇〇丁で、貸本の際の書名と借主、返却の確認などを記す台帳で、貸本屋名などの記述はないが、借手の住所から兵庫県の高砂市周辺と考証され、また書名を検討すると明治四〇年前後の資料と考えられるとのことである。

ご高配に与りました長友千代治先生、大竹正春氏に深甚の謝意を表します次第です。